
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 55, 2019. 12

半澤 洵先生小伝 (3) -社会事業への情熱-	半澤 久	1
博物館に押しかけよう会報告「江別市セラミックアートセンター」	高橋 道子	6
博物館に押しかけよう会報告 (旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮)	山田 大隆	7
SPレコード鑑賞会について	石川 恵子	8
ボランティア活動は焼肉のようなものでして	長谷川健太	9
追悼 松枝大治先生	山崎 敏晴	10
久万田敏夫初代会長を偲ぶ	櫻井正俊・志津木真理子・星野フサ	11

特別寄稿

半澤 洵先生小伝 (3) -社会事業への情熱-

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

1. 社会への目、人のため

祖父半澤 洵は、1892年(明治25)年に13歳で札幌農学校予科に入学した。そこで生涯の恩師と呼べる二人の教授との出会いがあった。ひとりには洵の学問研究での恩師宮部金吾博士、そして洵の人格形成に大きな影響を与えた恩師新渡戸稲造博士、両博士は札幌農学校予科2期の同期生である。

本稿では、洵が十代前半で敬愛する新渡戸博士から受けた教え「世のため、人のため」を生涯抱き続け、それを実践した社会事業を紹介する。第一は新渡戸博士が創立した「札幌遠友夜学校」(以下、遠友夜学校)、第二は児童生徒の養護支援教育・訓練施設の先駆け「柏葉荘」、そして第三は官公庁や公立学校退職者の生活改善への活動である。

2. 「札幌遠友夜学校」とともに50年

私が小学生の頃、祖父洵が書類や資料の整理をしながら聞かせてくれた話の中で思い出すのは「新渡戸先生」と「遠友夜学校」である。当時の私はどちらも知らないことであったが、祖父は親



写真1 左から新渡戸稲造、有島武郎、半澤 洵

しみを込めた口調で度々「新渡戸先生」と言っていたのをよく憶えている。いま思えば、これは洵が新渡戸博士と遠友夜学校のことを非常に大切にしていた思いが詰まったことと今は理解できる。

遠友夜学校は、1894(明治27)年6月に新渡戸博士により創立され(現在の札幌市中央区南4東4丁目)、2019(令和元)年6月は開校125周年に当たる¹⁾。この夜学校は、学びたくても学校へ行けない人や昼間働いている人が学べる、学費はなし、男女共学、先生は生徒の友達、など当時の時代・社会背景では全く例のない先進的かつ慈愛に満ちたものであった。創立時、洵は札幌農学校予科生で15歳であった。新渡戸博士の尊い理念に基づく

*タイトル「半澤 洵先生小伝」は、編集委員会による。

遠友夜学校の教師ボランティア募集に応じたその後、予科5年から編入してきた有島武郎ら同期生と遠友夜学校の教師を務めた(写真1)。洵は遠友夜学校を閉校する1944(昭和19)年まで50年間にわたり新渡戸博士の教育理念と目的を守り続け、その運営・維持・発展に努めた。

洵が著した『新渡戸博士と遠友夜学校』²⁾ならびに北大大学文書館リーフレット『遠友夜学校の歴史』³⁾をもとに遠友夜学校の時代推移を表1に示す。洵は50年の間で、1921(大正10)年には初代の宮部金吾博士から数えて7代目の遠友夜学校代表となった。さらに1939(昭和14)年からは新渡戸萬里子夫人の後を継いで校長に就任し、閉校まで努めた。

なお、遠友夜学校に関する文献等は多数あるが、本稿では、おもに『遠友夜学校』(さっぽろ文庫18)⁴⁾を参照・引用した。なお、中川厚雄氏の著作『札幌遠友夜学校研究』I～V⁵⁾は、生徒と教師についての詳細なデータや直接取材した記録を見ることが出来る大変貴重な研究資料である。

遠友夜学校は、新渡戸萬里子夫人が米国の縁者から受取った遺産全額を創立資金にあて開校した。その後、この事業に賛同する篤志家、札幌農学校後に北海道帝国大学の学生・教員からの継続的な維持会費、企業・団体からの臨時寄附金、さらに1911(明治44)年からは公的補助金(宮内省、厚生省、北海道庁、札幌市役所ほか)などの収入も得て維持・運営されていた(表1)。1923(大正12)年に遠友夜学校は財団法人の認可を受けた(表1)。

遠友夜学校への支援は、資金のみならず運動会など行事のために商店主や企業から学用品や日用

表1 札幌遠友夜学校の開校から充実期までの推移

年代	札幌遠友夜学校の推移
1894年(明治27)	札幌独立教会附属日曜学校(札幌農学校生徒等で経営)の敷地及び校舎を買い取り、夜学校(2教室)を開校。「札幌遠友夜学校」と命名。
	リンコルン会:新渡戸先生がエイブラハム・リンカーンの人となりを愛したことに生徒が感激して、リンカーンの言動を習うことを旨として生まれた。
	当時、ようやく社会事業なるものの重要性が認識されるようになった時期であったが、その実行はきわめて微々たるもの。
1897年(明治30)	篤志家の寄附で、24坪(約79㎡)の校舎(4教室)となる。尋常科と高等科の2科に分ける。
1900(明治33)	小学校令に準じて授業を行うことができるようになる。
1909年(明治42)	新渡戸先生来道を迎えるに当たって、校舎増改築が発議され、600円(現在価値で約450万円)の寄附を得て、旧校舎の大修繕と増築を行い、4教室・事務室・当直室で延べ74坪(約244㎡)、120人の生徒収容が可能になる。尋常科を各2学年に3教室、高等科を1教室にする。1教室に2名の教師が担任。
1911年(明治44)	この年より、内務省並びに北海道庁より、補助金、奨励金等を受ける。
1916年(大正5)	私立学校の認可を受ける。
1920年(大正9)	校舎の腐朽が甚だしくなり、寄附金を募り、3千円(現在価値で約2,300万円)を得て改築に着手。教室10・当直室・その他で延160坪(約528㎡)。収容人員250名可能となる。男女共学単級制とする。かつ時勢の要求に応じて、高等科に準ずるものを廃し、4年生の中等部を併設し、中学校及び女学校の初年程度を学習させる。
1923年(大正12)	組織を法人とし、事業の永續と発展とを期すこととなり、新渡戸先生は夜学校の財産をすべて寄附したので、5月に財団法人札幌遠友夜学校を設立。
1929年(昭和4)	札幌市より小学校の旧校舎の払い下げを受け、教室10・屋内運動場・職員室・当直室、図書館等を有する木造亜鉛張鉄板葺き2階建てとなり、500名以上収容可能となる。
1936年(昭和11)	敷地面積521坪(約1,719㎡)、建築面積187.5坪(約619㎡)、延床面積332.25坪(約1,096㎡)の規模となる。

品などの寄附提供もあった(写真2)⁶⁾。

遠友夜学校では、教室での勉強だけでなくスポーツや遠足・海水浴なども行っていた。また、学芸会もあった。写真3は、有島武郎が札幌農学校教員時代に学芸会の劇を指導し上演した様子である。これは、へき地教育研究に長年取組まれた高柳 晃先生が所蔵されていたもので、そこには遠友夜学校生徒であった同先生のお母様が写っている。新渡戸博士は、1897(明治30)年に札幌を離れた後1909(明治42)年と1931(昭和6)年に2度来校している(写真4)。2度目で最後となった遠友夜学校

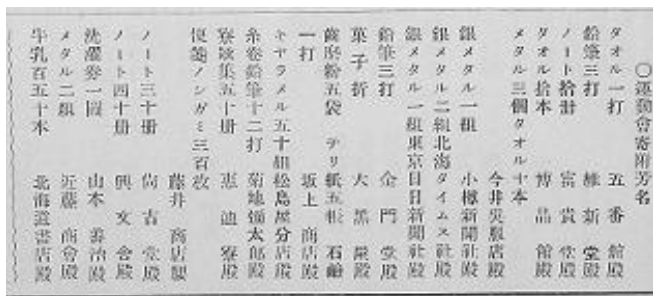


写真2 運動会寄附者芳名
遠友(札幌遠友夜学校学期報) 第19号、1936年8月発行⁶⁾より(北大大学文書館所蔵)



写真3 有島武郎が指導した劇を学芸会で上演（大正初期）
写真右端の少女が高柳先生のお母様
（高柳 晃先生所蔵）



写真4 新渡戸博士来校記念（1931（昭和6）年）
2列目左から4人目宮部金吾博士、新渡戸稲造博士、
半澤 洵（52歳）、平塚直治提供（北大大学文書館所蔵）

訪問時に講話をし、その中で洵のことも言及している。以下にその一部を引用する⁷⁾。（太字は著者）
「此の學校を始めるに當り先生を頼んだ。學問の出来る人のみを頼んだのではない友達になれる一遠友になれる人、子供を可愛がる人、畢竟人と会って明るい気持ちで親切にして呉れる人を頼んだ。だから遠友夜學校に来て居た人は立身する。

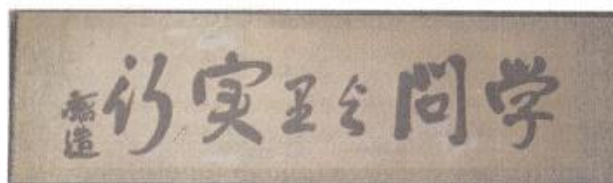
萬事私に代って代表をして下さった人は何んと偉い人ではありませんか、近頃は専ら半澤先生が色々な事をして下さる。教育は物を覚えることよりも立派な人だとされる方が後々の成功も確かだ。

（中略）又寄附をせられる方々も額の如何を問はず使ひ道がある可金を出す世の中は美しい。自分一個の為のみでは世の中は存在しない。**人の為と思へばこそ嬉しい**、故に此の學校の関係者の心も考へ親達の意を考へ、即ち遠友の意を考へ、若い中にも學校の内でも自分の出来る事なら人の為にする、學校を出てからも、**尚如何にせば世の為人の為になるかを考へ**、何事によらず人の心の表われだから、學校の歴史、先生のなさる事又學校を助けてくれる人や學校の名に背かぬ様互に心掛け、**唯に本を読み算術をするのが學校の仕事と思はず、人格を養成し明るい気分の人を養ふ事が目的である**」と全生徒を前にして語りかけた。

この時、新渡戸博士は、写真5の揮毫をした。ひとつは新渡戸博士が尊敬するリンカーン大統領二期目の就任演説の一節 “With malice toward none, With charity for all” を英文で書いた。



「何人にも悪意をもたず、凡ての人に愛をもって」
1865年3月4日リンカーン大統領の2期目の就任演説の一節



學問より実行

写真5 新渡戸稲造揮毫の扁額（2度目の来校時）
上段：北大大学文書館所蔵、下段：『遠友夜学校』
（さっぽろ文庫18）⁴⁾より



写真6 遠友夜学校講堂の新渡戸博士の揮毫扁額
1932（昭和7）年3月卒業式、前列左から5人目洵
（53歳）（北大大学文書館所蔵）

また「學問より實行」の揮毫は、講堂に掲げられいつも生徒たちが見ることが出来た（写真6）。

新渡戸博士は、この来校の2年後1933(昭和8)年10月にカナダのブリティッシュコロンビア州都ビクトリアで客死した。洵は、新渡戸博士追悼集に「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」と題し寄稿している。その一部を以下に引用する²⁾。(太字は著者)

「博士の本校設立の精神を体し是が具現に努めて来たが、教師として集った学生は何れも博士の徳風を慕ひ、博士の精神に共鳴しその事業の一部に参加する光栄と喜びとを感ずる者のみで、何等の報酬なきにかかはらず多忙なる勉学の傍ら熱心、その授業に、その経営に当って倦まず、その中に又自らの人格を棟やし^{ただ}畜に教へるのみならず、自らも教へられて、各方面に散り、本校にて養ひ得た精神の發揮に努めて居る。(中略)

前述の様な本校の事業の発展は勿論、(中略)其の趣旨に賛して之が維持発達に努力した多くの人々の力に負ふ所が多いのであるが、その創立者であり又校長として一生此に力を致された博士の人格のあるに非ざれば到底今日の結果を望み得なかつたであらう。実に**本校は博士の精神の具現であった。**(中略) **其は博士が今日札幌に残された唯一の事業**であり、その形は非常に小さいものではあるが、其が博士の理想の一部であり、その人格の具体化である事を憶って、私等幸ひこの事業の一部を担当する事を許されたものは、その創立の精神の貫徹に微力を致したいと願って居る。」

このように、洵は、遠友夜学校の事業を通じてあくまでも新渡戸博士の「人間教育の理想の実現」に努め続け、その維持・発展に努めていたことがわかる。

遠友夜学校は、新渡戸博士が他界した8年後大東亜戦争最中の1944(昭和19)年に閉校となった。その後、遠友夜学校の跡地は児童公園となり、そこには洵の他界後1974(昭和49)年に新渡戸博士夫妻顕彰碑が建てられた。その除幕式には、洵とともに遠友夜学校運営に尽力し閉校措置にも対処した高倉新一郎博士をはじめ洵の長男道郎やひ孫(道郎の孫)齋藤絵奈などが参列した(写真7)。新渡戸博士を深く敬愛した洵が「博士が今日札幌に残された唯一の事業である」と記した遠友夜学校の業績が、札幌の人々の誇りとなり、将来世代に継承されることを私は洵の孫としてまた札幌に住む者として願っている。



写真7 新渡戸博士夫妻顕彰碑の除幕式
1974(昭和54)年11月23日

3. 養護児童施設「柏葉荘」

洵は、北海道帝国大学を定年退職後、昭和20年代以降も社会事業にかかわりを持ち続けた。そのひとつが北海道共同募金会である。洵は、1951(昭和26)年から1959(昭和34)年まで会長を務めた⁸⁾。その頃の共同募金運動に関するエピソードを、洵の隣人でもある高倉新一郎博士が次のように記している⁹⁾。

「共同募金運動の初期には、税務署使用済の印紙に対し、額面二～五%を戻してくれるというので、東奔西走して貼った書類を借りて、丁寧にはがして、遂に十万余円を得、これを社会事業に役立てられたことなどは、先生の面目を躍如としてみる事ができるだろう。」

この募金活動において、洵が草の根的な方法に徹して人々からの浄財を得ようとしたことの表れであったように思える。

このようにして得た共同募金が活用され設立された施設ののひとつに「柏葉荘」がある。柏葉荘は、その沿革によると、1957(昭和32)年12月に養護児童アフターケア施設(青少年育成施設)の設立が起案され、北海道共同募金会から北海道知事に申請された¹⁰⁾。この施設設立のため、翌1958(昭和33)年8月に財団法人北海道青少年育成施設設立準備会が発足し、洵はその初代理事長となった。洵が北海道共同募金会会長の任にあるときであった。同年12月に柏葉荘の建物が竣工した。翌1959(昭和34)年3月に児童福祉法による養護施設として認可され、同年4月から札幌市立白石小中学校柏葉荘分校として認可された。

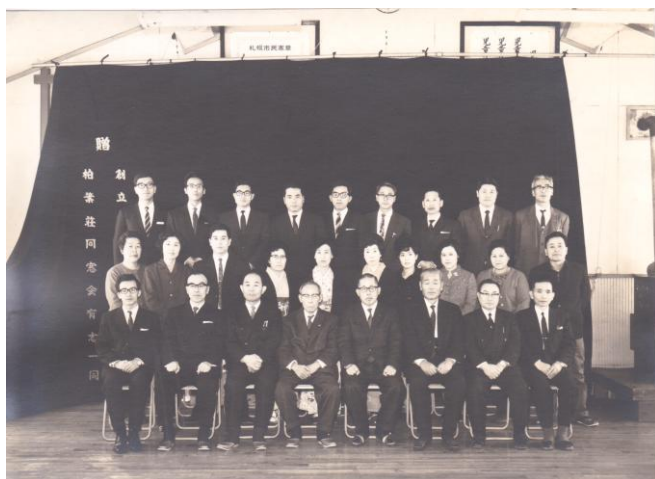


写真8 柏葉荘にて 1965(昭和40)年頃
後部の幕には贈 柏葉荘同窓会一同と記されている。
前列左から4人目が洵(80歳代半ば)(半澤 洵所蔵)

社会福祉法人柏葉荘設立趣意書¹¹⁾には、「殊に養護施設、その他の社会福祉施設に収容中の者で、義務教育課程を修了しても尚社会に進出する機会に恵まれず、特に技術習得或いは向学心を阻まれ余儀なく無為徒食の日を過ごす者等多数ある現状は、国家的にも一大損失である。従ってこれらの青少年の社会進出を積極的に援助すると共に、彼等と社会との接触を密にして自活に必要な教養と技術を受け社会福祉施設が現下絶対不可欠で、関係方面も待望していた処である。」と記されている。さらに「この施設に収容すべきは全道養護施設その他の児童関係施設に収容中の年長児を対象として、社会的教養と職業的訓練を受け彼等が速かに正当な社会生活に入り得るよう、援護育成する目的をもって設立し、その必要性に応えんとするものである。」と記されている。

柏葉荘は、当時の時代の要請に応え、養護施設から巣立つ青少年のための社会教育と職業訓練を行う施設として事業が開始され、洵はその立ち上げと初期の運営に携わった。現在は、「児童養護施設柏葉荘」として社会福祉法人扶桑苑(理事長小川敏雄氏)のもとで継続的に運営されている。

4. 北海道退職公務員連盟

洵には、もうひとつ長年関与した社会的活動がある。それは昭和20年代以降の退職公務員すなわち恩給受給者の生活安定化とその向上活動である。洵自身も北海道帝国大学を定年退職した恩給受給

者であった。昭和20年代当時の恩給額は、多くの受給者にとって、定年後の安定した生活を維持するには十分とはいえず、増額の要求が強かった。そこで、公務員の退職後の恩給増額を求めるための運動が起こり、1947(昭和22)年6月北海道恩給増額促進会が結成され、翌1948(昭和23)年7月には北海道恩給受給者連盟と改称、さらに1951(昭和26)年2月北海道退職公務員連盟(略称 退公連)と改称し、現在に至っている。洵は1947年(昭和26)年にその初代会長に就任し、1972(昭和47)年9月に他界するまで務めた¹²⁾。この団体では、退職後の公務員など(発足当時は官公庁、国公立学校、国鉄など三公社五現業を含んでいた)の生活安定を目指し、年金制度改善に取り組んだ。

洵は、これまで記したさまざまな社会事業への貢献も評価されて、1969(昭和44)年には第1回北海道開発功労賞表彰を受けた。これは、洵が新渡戸博士からの教え「世のため、人のため」を実践し続けたことが高く評価された証と思う。そして、それを支えた洵の妻美加を筆頭に家族・親族の協力もはずすことはできない。

引用文献

- 1) 藤田正一(2019) 遠友夜学校創設125周年によせて. 北海道大学総合博物館ボランティアニュース No. 54.
- 2) 半澤 洵(1936) 新渡戸博士と札幌遠友夜学校. 新渡戸博追悼集, 故新渡戸博士記念事業実行委員会. さっぽろ文庫18『遠友夜学校』に転載.
- 3) 遠友夜学校の歴史(2019) 北海道大学大学文書館リーフレット.
- 4) 札幌市教育委員会編(1981) 遠友夜学校. さっぽろ文庫18.
- 5) 中川厚雄(2010-2019) 札幌遠友夜学校研究, I~V. 2010年12月~2019年4月.
- 6) 遠友(札幌遠友夜学校学期)9号, 1936年8月発行, 北海道大学大学文書館所蔵.
- 7) 新渡戸稲造(1931) 學問より實行—新渡戸校長のお話1931(昭和6)年5月18日御来校. 遠友(札幌遠友夜学校学期報)9号, 1931年11月発行, 北海道大学大学文書館所蔵.
- 8) 北海道共同募金会50年史編纂委員会編(1998) 赤い羽根北海道の50年. 社会福祉法人北海道共同募金会.
- 9) 高倉新一郎(1978) 隣人としての半沢先生. 『白石歴史ものがたり』, 札幌市白石区老人クラブ連合会編集委員会.
- 10) 社会福祉法人扶桑苑 法人案内, 2019年10月.
- 11) 社会福祉法人柏葉荘設立趣意書. 1959年3月25日, 社会福祉法人扶桑苑所蔵.
- 12) 社団法人北海道退職公務員連盟編(1997) 五十年の歩み連帯の日々を刻む. 北海道退職公務員連盟50周年記念.

活動報告

博物館に押しかけよう会報告「江別市セラミックアートセンター」

北大の歴史展示ボランティア 高橋道子

江別市 CAC レンガ資料展示室での1時間

今回私達が押しかけたのは江別市セラミックアートセンター（CAC）です。設置者は江別市、運営者が江別市教育委員会、1994年設立の地域施設です。配布プリントのコンセプトによると“地域の解明や地域文化の向上を目的に市民の生涯学習に対応できる”名所・旧跡・特産物を観光目的から紹介する典型的な地域博物館です。

“レンガは江別の生産物であり、歴史・文化資源である”というコンセプト¹⁾の通り、眞坂隆太学芸員に説明された主な展示は、「レンガの特性」「工場・窯の各種模型」「工場模型」「レンガ刻印一覧」「略年表」「工場分布図」久保榮『のぼり窯』実物、ハンズオンはレンガ積み体験でした。寄贈された「日本赤煉瓦建築番付」²⁾が人気を集めていました。写真パネルは野幌から借用したもので、江別煉瓦の歴史を展示しようと資料を収集・選択、作成し借用して作りあげた過程を想像しました。私個人はレンガといえば点字ブロックという程度の予備知識でしたが、煉瓦工場と製作技術詳細をパネルで拝見し、レンガを積み、歴史を刻んだ写真を見て私達は各自の記憶を総動員し気づいた事を語りながら賑やかに見学して回ったのでした。ブレイクストーミングもできて回想法³⁾効果ですっきり元気になれたのではないのでしょうか。博物館効果です。そんな私達の学びは、解説の眞坂さんと写真係の女性にどのように映ったのでしょうか。約1時間の間二人はずっと私達見学者の質問を受けていました。北海道大学総合博物館ボランティアメンバーズの見学はひと味違ったのでしょうか。

事後学習して事前学習不足を後悔

帰ってから分かったことですが、江別 CAC は広大な敷地に贅沢に空間利用した博物館で、平らな町を一望できる展望台がありました。登って見たかったです。

北のやきもの展示室と小森忍記念室を観ていませんでした。知るほどに思うことは、小学生はここで江別の町を知り、誇りを持って自分達の町を語るのではないか、大人がここで陶芸を始めたら、技術と歴史を学び、ボランティアデビューして魅惑の高齢者生活を送れそうということです。

今後機会があれば CAC と江別郷土資料館、北海道遺産のガラス工芸館、運動・森林公園も巡り、眞坂学芸員が推していた商業施設 EBRI での小麦製品・農作物・工芸品お買い物も組み込んだ、より江別を知り好きになるツアーを計画したいものです。

- 1) えべつコレクション vol. 11 江別観光協会, 2019. 7
- 2) 東の二番手横綱の「赤煉瓦庁舎」は9月30日に閉館しました。リニューアルオープンの2023年には是非押しかけましょう。
- 3) 回想法は、昔懐かしい展示物を見て思い巡らし、会話することで効果を生む精神療法。



江別セラミック全景



博物館内を見学している様子

活動報告

博物館に押しかけよう会報告（旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮）

図書ボランティア 山田大隆

総合博物館ボランティアの会第26回博物館に押しかけよう会は、中央区北2条東6丁目にある旧永山武四郎邸（明治10年代建造）及び旧三菱鉱業寮（昭和12年建築）の二つの歴史的建造物訪問で、10月26日に実施された。参加者は11人だった。札幌商工会議所観光ボランティアガイドの会の展示解説員の宮本氏の充実した解説もあり、博物館研修の目的が達成されたのは何よりであった。

永山武四郎の生涯

この最初の記念館（旧永山武四郎私邸）の所有者であった永山武四郎（1827～1904年）は、鹿児島県出身の明治期北海道の著名な陸軍高級将校・政治家で、第2代北海道庁長官、屯田兵司令官、第七師団（旭川市）師団長を歴任し、最終的には貴族院議員となった北海道開拓の中心人物である。日本北辺を守る陸軍第七師団創設の功労者で、旭川市内にある、旧第七師団を後継する現在の陸上自衛隊旭川駐屯地内の戦史博物館「北鎮記念館」には、初代師団長であった永山の遺品や事績の展示がある。また同市の永山町の命名は、第七師団創設と上川地域開拓での彼の功績に由来する。

開拓使次官黒田清隆は、開拓使お雇い外国人技師の元米国農務長官ケプロンが作成した『ケプロン報文』（1875年）の提言により、農業開発と北辺防衛を担う半農半兵の屯田兵制度の創設を計画し、その責任者に旧薩摩藩出身陸軍大尉の永山を抜擢した。彼は黒田の要請を受けて、開拓使出仕後に屯田兵制度（札幌、旭川、北見、江別ほか、明治8～35年、最大5万人、旧士族中心）の確立に尽力し、西南戦争には大隊を率いて参戦し、その功績で屯田兵本部長そして司令官となり、さらに米国、ロシア、清国を視察して、『周遊日記』を執筆出版した。

旧永山邸とその後の保存運動、活用事業

永山は開拓使時代に札幌に自宅を建て、退役後

に貴族院議員（男爵）となったが、上京中に発病死去し、遺言で札幌の豊平墓地（のちに里塚霊園に改葬、墓石が現存）に埋葬された。

旧永山邸は和風書院座敷と洋風応接室が直接つながる和洋折衷の造りで、明治初期の和洋折衷住宅のはしりとされている。1987年に北海道指定有形文化財に指定されている。

武四郎逝去後、1911年に三菱合資会社が土地・建物を買収、さらに昭和12年に武四郎邸に接続して、モダンな洋館（2階）を増築し、重役専用宿泊所や三菱鉱業の社員寮となった。その後札幌市が歴史的なまちづくりを進める目的で、邸宅と庭園を買取った。北大工学部建築学科建築意匠講座の研究と補修後、二つの建物は2016年に札幌市の歴史的建築物となった。

旧永山邸は典型的和洋折衷の上流家屋で、和室出入り口には門構えの柱、武器を隠した戸棚を有し、洋間は出窓を配する重厚簡潔な意匠で印象的。

増築部の旧三菱鉱業寮の1階では、三菱鉱業の歴史パネルと建物模型があり、映像設備で社史を示す。母子彫刻立像は鉱山事故を悲しむ心情の表現とされる。2階は社員の宿泊休憩室で、現在は貸室として賑い、先日（11月4日）には、北海道遺産の第1回オープンラボが開かれ、1階カフェとともに盛んな利活用実態の好例となっている。



右から2番目、札幌商工会議所観光ボランティアガイドの会の展示解説員の宮本氏

活動報告

SPレコード鑑賞会について

チェンバロボランティア 石川恵子

北海道大学総合博物館の建物は、1929（昭和4）年に理学部本館として竣工され、今年90周年を迎えます。これを記念してその頃に作製されていたSPレコードの鑑賞会が連続開催されることになり、私の所有するレコードを提供、聴いて頂けることになりました。祖父や父が鑑賞のために購入していたSPレコードを譲り受けて以来長年保管していましたが、当時の貴重な名演奏を聴いて頂ける機会があることを願っておりましたので、この度の企画で使用して頂き、たいへん有難く感謝しております。

この度の企画では、博物館メディアボランティアとの共催で、私はレコードの提供とプログラムの企画案の作成、当日のレコード再生と簡単な解説をさせていただいています。

メディアボランティアの方々には、鑑賞会に向けて、レコードを聴きながらの検討会、チラシの作製、HPやフェイスブックへの掲載、会場設定、司会進行等でお世話になっています。

SPレコードは、19世紀後半から演奏時間の長いLPレコードが現れる20世紀半ばまでの約70年間に限定作製された毎分78回転ほどのレコードで、演奏時間は数分です。天然樹脂製で、重く割れやすいのですが、当時の名演奏が鑑賞できますので、今では大変貴重な歴史的文化遗产です。この企画は、博物館でこそ開催されるにふさわしいように思われます。

初回は、8月9日（金）旧理学部長室（現博物館応接室）にて、18時から蓄音器を使用して、＜自作自演の曲＞を選んで開催され、蓄音器は苫小牧の中坪淳彦氏のご持参下さいました。自作自演とは、例えばラベル作曲の「ボレロ」をラベル自身が指揮をしているもの、又はエルガー作曲の「威風堂々」をエルガー自身が指揮をしているもの等で、演奏の指針ともなる貴重な記録で、興味深く聴いて頂けたと思います。理学部創立当時の由緒ある良い雰囲気のお部屋で蓄音器を使用して

の鑑賞会は好評でした。

第2回は、10月9日（金）博物館一階カフェ北の「知の交差点」で17時半から、＜名演奏家による独奏曲＞のテーマで開催されました。この会では、SPレコード対応のプレーヤーを用意して下さい、四方の隅上からのスピーカーや低音用のスピーカー等の使用により、音を楽しむ鑑賞会となりました。来館者の方々にも気楽に立ち寄り、楽しんでいただけたことと思います。

第3回は、＜日本の音楽家＞のテーマで、12月21日（土）15時から「知の交差点」で開催の予定です。当時の日本にも、ヨーロッパに留学して、海外で活躍する実力のある音楽家が少なからずいたことを知っていただければと思い企画しました。当時の音楽家は、外国人も日本人も共に、その人生に戦争の影響を他の人々同様に、大きく受けていることに改めて気付かされます。

その一人ひとりの人生にも想いを致しながら鑑賞して頂ければ、単に音楽を聴く以上により味わい深く、意義のあるものとなるように思います。そのことは、当時のSPレコードを購入して鑑賞していた祖父や父、母、周りの人たちの人生に想いを致すことにもなりました。



第1回 SPレコード鑑賞会（2019年8月9日）
中坪氏（前列右）とメディアグループの方々
筆者は前列中央

活動報告

4D シアターボランティア活動は焼肉のようなものでして

4D シアターボランティア 北大文学部中国文化論研究室 3年 長谷川健太

私は、北大文学部中国文化論研究室に所属しており、学芸員養成課程の授業も受けています。宇宙の4Dシアターボランティアでは、今までに公演シナリオの作成や当日の司会進行、ポスター・フライヤーの作成を担当してきました。演劇サークルに所属している僕にとって、公演プログラムを企画運営したり公演の宣伝媒体の作成をしたりするこのボランティア活動は、サークルでの経験を生かせる上に様々な世代や立場の人々との交流するとても良い機会になっています。

僕が宇宙の4Dシアターの活動に参加しようと思ったきっかけは2017年夏に「北大総合博物館ミュージアムマイスター認定コース」に登録したことです。登録学生が参加するプロジェクトのひとつとして「宇宙の4Dシアター」がありました。それまでボランティア活動をしたことがなかったため不安でありましたが、ボランティアの皆さんはとてもフレンドリーな方ばかりで有意義な時間を過ごすことができました。有意義に過ごすのは良かったのですが、半年間の参加期間の後に提出する最終考察レポートが間に合わずもう半年続けることにしました。正直に言えばしょんぼりすることはありませんでした。レポート提出が間に合わなかったのは置いておくとして、僕の学生生活の中で「宇宙の4Dシアター」はそれくらいの存在になっていたのです。ちなみにこの時点ではまだ宇宙の4Dシアターのボランティアではありません。

次の半年はより積極的に活動に参加しました。2018年7月のカルチャーナイトでは「中国は擬神化がお好き！？～星から生まれた神さまたち～」のシナリオ作成や当日の進行、同年10月の「星出づる国～日本が紡いだ宇宙の灯～」ではポスターとフライヤーの作成をしました。研究支援推進員の皆さまにアドバイスを頂きながら自分でも満足のいくものが完成しました。また12月の「ちょっとはやめの紅白歌合戦星(スター)が大集合！」では白組司会を担当しました。この公演は2018年の

総決算ということで2018年に行われた公演のポスターをすべて展示して振り返る企画も行いました。来館者の皆さまには公演も展示企画もどちらも喜んでいただけたようで喜びもひとしおです。そして無事に最終考察レポートを提出。時間はひとの2倍かかりましたが、学んだことはひとの100倍です。

そして2019年春、宇宙の4Dシアターボランティアのメンバーになることができました。これからも自分のペースで活動に参加しようと思っております。ボランティア活動を肉を焼くことに例えるならば、僕は肉をこんがり焼く派。長く焼いた分、ちょっと苦いところもあるけれど脂身の乗った部分は甘く仕上がっております。もちろんサツと焼いて食べるのが好きなひとといえば、肉よりもビールを飲む方がメインのひとにいるだろうし、誰かが食べる姿を見るのが好きなひとだっているでしょう。僕たちがちゃんと肉を焼けるように網を交換してくれるひとたちの存在も忘れられませんが、1年生から活動が続けて、焼肉はいろんな人と食べてこそ美味しいなと思うようになりました。今日も僕はじゅうじゅうと気長に肉を待ちながら網の前に座っています。



「ちょっとはやめの紅白歌合戦 星(スター)が大集合！」での筆者(2018年12月15日撮影)

追 悼

追悼 松枝大治先生

展示解説ボランティア 山崎 敏晴

2019年9月22日に松枝大治先生がお亡くなりになりました。享年73歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、先生との思い出を書かせていただき追悼とさせていただきます。

先生との出会いは、先生の研究分野である鉱物学・鉱床学等の学問からではなく、2001(平成13)年に北大が創基125周年記念事業の一環として、総合博物館に於いても企画展示を開催する事になり、博物館1階展示室「知の交流」に「中谷宇吉郎」博士の展示コーナーを設けるため、その企画や展示のお手伝いをした事に始まります。

実はこのお話しは、松枝先生から直接いただいたのではなく、中谷先生のお弟子さんである若濱五郎先生が私を先生に紹介していただき、私としてはとても名誉な事でしたから直ぐに二つ返事でお受けし、約束の日に当時は博物館2階の南側にあった先生の部屋を訪ねました。

私は中谷先生について、1989(平成元)年頃から興味を持ち、先ずは著作等の文献収集を始めましたが、北大との関わりはまったくありません。ですから、北大の教授とお会いし話す機会は、生まれてこの日まで一度もなかったため、とても緊張してドアをノックした記憶があります。そして、初めてお会いした時の率直な記憶はとても朗らかで優しく、学歴のない私に対しても丁寧にご対応いただきました。

松枝先生は、中谷先生の展示コーナーを手がけるまで、研究分野も違う事から「中谷宇吉郎」に関して余り詳しくご存じなかった様でしたが「知の交流」での展示が完了すると、次の展示として2003(平成15)年のIUGG(国際測地学・地球物理学連合総会)札幌大会開催に併せ「中谷教授室N123」の復元展示に早速取りかかる事になりました。

先生は理学部の廃棄品置き場等から昭和初期に使用されたと思われる使い古しの机、椅子や什器

類を蒐集され、見事に理学部開学当時を思わせる中谷先生の教授室を再現されました。

また館内での企画展示だけではなく「中谷宇吉郎の生誕の地」である、石川県加賀市で講演をされました。更には2012(平成24)年の「中谷宇吉郎没後50年記念事業」では、春夏秋冬と数回開催された行事を力強くご支援いただき盛大に終える事が出来ました。

その他にも事あるごとに、私どもの意見に耳を貸していただき、色々な企画の開催にもお力をいただきました。

私的な思い出としては、松枝先生ご夫婦と参加した大雪山・旭岳での「雪の観察会」が思い出されます。行事終了後の宴会も楽しくて美味しい酒が飲めました。

2020(令和2)年は、中谷宇吉郎生誕120年節目の年となります。またご一緒に記念行事を行いましょうと言っていた矢先での訃報でした。

その驚きと悲しみは言葉では表しきれません。

中谷宇吉郎の名を大学内だけではなく全道、全国へ再び発信することが出来たのは、ひとえに松枝先生の多大なるご尽力があつての事です。

ここに感謝の言葉を書かせていただきます。

長い間、本当にありがとうございました。



中谷宇吉郎没後50年夏季記念行事での松枝先生(2012)

追悼

久万田敏夫初代会長を偲ぶ

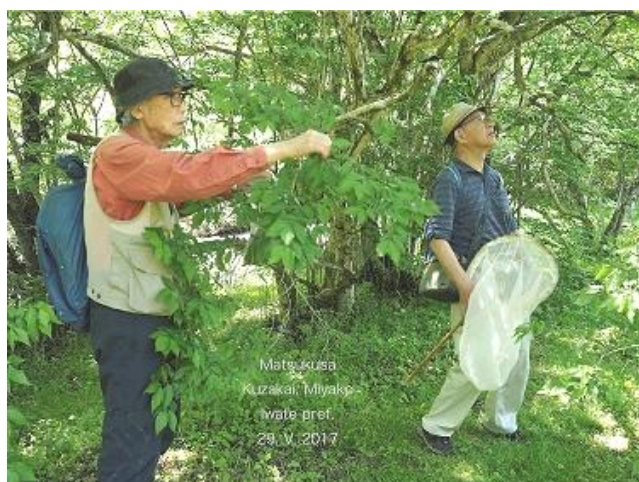
久万田先生と過ごした日々

昆虫ボランティア 櫻井正俊

久万田先生との出会いは 2000 年に札幌で開催された「みちのく会」という蛾類の研究者や同好者が集まるミニ学会でした。ちょうどその年、先生は鱗翅類学の最高荣誉とされる「カール・ジョーダン・メダル賞」を受賞されたので、メダルのお披露目とともにホソガ科の系統分類について講演されました。先生が提唱された分類は、その後 2016 年に発表された分子系統学的研究の結果と非常に良く一致することが確かめられ、先生はとても満足そうでした。

先生と親しくお付き合いをさせて頂くようになったのは、昆虫図鑑『北海道の蝶と蛾』に北大総合博物館所蔵のホソガ標本の使用をお願いしてからのことです。2015 年にその図鑑が完成した時、先生からホソガ科の図鑑を作りたいので標本を撮影して欲しいと依頼されました。当時、ホソガ科の図鑑は先生によって『日本産蛾類標準図鑑』第 4 巻として刊行されたばかりだったのですが、先生としては満足されていなかったらしく、より精緻な成虫写真、交尾器図、幼虫図などを完備し、多数の新種や日本未記録種に加え、未同定種も可能な限り網羅したモノグラフを作りたいとのことでした。私は張り切って近頃はやりの「深度合成写真」と精度の高い画像切り抜きや色調補正などを駆使して作画しました。この図鑑は 2 巻に分けて刊行が予定されていますが、成虫のカラー図版はこれまでにほぼ 1 巻分の作成を終えています。図版の仕上がりを見て、「もう標本を見なくてもいいな」と嬉しそうに何度も冗談めいて仰っていました。しゃつたことは私の大きな喜びでした。

先生の大きな業績の一つに鱗翅目では初めて「過変態」を発見されたことが挙げられます。過変態とは幼虫に形態と習性が異なる複数の発育型が生じることで、先生は吸液型・咀嚼型・吐糸型・静止型の 4 つの発育型を認めました。ホソガ科は



久万田博士（左）と奥博士
岩手県のハナヒョウタンボク自生地にて、2017 年 5 月

国内で 200 種以上が確認されている大きなグループですが、そのほとんどの種で初期の幼虫は葉に潜り、少なくとも 2 つの発育型をもちます。中でも吸液型の幼虫は大顎が平らな丸鋸状となり、それらを左右に振り動かすことによって植物の細胞壁を切り開いてその内容物を飲むという特異なもので、その形態は分類上も非常に重要とされています。幼虫の口器の図はホソガ図鑑の目玉となるはずだったもので、先生は鉛筆による見事な下書きを残されています。

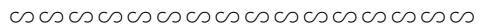
また未記載種や日本未記録種などで標本数の少ないものは新たに採集する必要もありました。たまたま岩手で発見されたホソガが北大総合博物館に所蔵されているロシア沿海州産のパラタイプと一致することがわかった時でしたから、このホソガを狙ってやろうという事になりました。先生と二人で一昨年の 5 月に岩手に行き、昨年の 10 月にも秋の発生を確かめるために再訪しました。この二度の旅行では盛岡市にお住まいで先生と学生時代同期の奥俊夫博士に現地を案内して頂いたおかげで目的のホソガのほかにも多くの成果を挙げる事が出来ました。奥博士とは 2000 年以来の再会だったそうで、先生にとっては旧交を温めることも出来た有意義な旅だったことでしょう。

先生のご健康は今年 3 月の高橋英樹先生の退官記念講演会のころが転機だったと思います。体調不良で欠席するとの連絡があつて間もなく肺炎で入院されました。その期間は短かったのですが、退院後体力の衰えが見受けられるようになりました。先生はご自宅に 100 種以上もの植物を植え込んだ素晴らしいロックガーデンをお持ちで、5 月から 6 月にかけてシャクナゲ、ツツジ、エリカなど様々な花が咲き乱れます。5 月 11 日に庭の花見に招いて頂いたとき、連休中に庭で転んで頭を打つたと聞きびっくりしました。軽い運動でもと、5 月 19 日に奥様もご一緒に恵庭湖方面に散策に出掛け、帰りに支笏湖の丸駒温泉に入ってきました。林道で奥様と野草についてお話しされている姿がとても眩しく印象に残っていますが、そのシーンを写真に残さなかったのが悔やまれます。その時が先生とお会いできた最後になるうとはまったく想像すら出来ませんでした。先生はその後 6 月 14 日にご自宅でお倒れになったのでした。

毎年 9 月には先生と厚真町などで、あるホソガを探すのが恒例になっていました。ホソガとしては珍しい色彩で明らかな新種なのですが、きわめて稀なためなかなか追加できずにいました。ところがこの 9 月になんと北大構内の恵迪の森で見つかったのです。先生にご報告が出来たらどんなにお喜びになったかと思うと残念でなりません。先生のご研究のお手伝いをしたり、発見を分かち合ったりすることはもう叶いませんが、こうして先生の最晩年を身近に過ごさせて頂けたのは一生の喜びです。ご冥福を心からお祈りいたします。



恵迪の森で採集された未記載のホソガ



特別な火曜日

昆虫ボランティア 志津木真理子

昆虫ボランティアに興味があり、初めて昆虫作業室を訪れた 2011 年夏の火曜日、久万田先生は作業室で標本の整理をしていました。少し緊張しながら佇む私に、先生は手を休め、後ろの棚の標本箱を取り出し「これは何トンボかわかるか？」とムカシトンボを見ながら、翅の形の違い、分布域の面白さを説明してくださいました。その後も、外国で採集した昆虫を出して採集旅行中の様子を気さくに話してくださり「ああ、ここなら大丈夫、やっていけそう」とほっとしたことを思い出します。

先生は毎週火曜日、作業室や標本庫で標本整理作業を続けられました。先生が休まれるのは奥様と道東などに釣りに行く時、沢庵を漬け込む時、お孫さんが遊びに来ている時くらいで、思えば 8 年間も毎週先生と一緒に部屋で過ごしてきたことになります。他のボランティアの方々や、学生時代をともに過ごされた方、研究室の後輩など、火曜日には多くの方が作業室を訪れ、和やかな雰囲気の中ソファでコーヒーを飲みながら、先生は歴代教授の思い出、博物館の在り方、旅行やご家族のこと、もちろんホソガについても話してくださいました。

先生は最初、ドクガ科の成虫と幼虫について研究しており、学部生だった 1956 年に初の英語論文を発表されました。しかしドクガ科の蛾は比較的大きなものが多く、標本箱がすぐに埋まり箱代がかさむため、小さな蛾であるホソガ科の研究にテーマを変えたそうです。ホソガならではの苦労も多く、まず翅の長さが 1 cm にも満たない程小さいことから既存の展翅板（翅を観察できるように広げて乾かすための道具）を使わず、道具の開発から行いました。先生が考案された小蛾用展翅板は今でも、なくてはならない道具として使い続けられています。また、幼虫が葉に潜って成長するものが多く、食草である葉の潜り跡も重要な標本となります。進路を決める際に植物にするか昆虫にする

るか迷われるほど植物がお好きだった先生は、食草の見事なさく葉標本を残されています。さらに、成虫が小さく見つけることが難しいため、潜葉した幼虫を飼育、羽化させるという方法で成虫を得ましたが、葉を枯らさない工夫、幼虫を越冬させる工夫など試行錯誤を重ねたそうです。得られた成虫は、解剖した交尾器のプレパラート標本と合わせ、さく葉標本も一連の関連した標本として番号を付けて完璧に整理され、手先が器用で植物にも造詣が深く、緻密で几帳面な先生だからこそホソガ科の研究という偉業を成し遂げることができたのだと思います。

先生とともに作業をする中で、標本を100年後、200年後でも活用できる状態で残すことの重要性を教えていただきました。そして「採集情報の書かれたラベルがなければただの虫の死骸にすぎない。虫採りとは虫を採って終わりではなく、標本にしてラベルを付けるところまで終えて初めて完了する」と常々話されました。また、標本にせず紙に包んで保管する際にも採集情報を省略せずに記入することの大切さを説かれました。現に私達ボランティアも情報が不足している標本の整理には苦勞させられ、採集者名のないもの、イニシャルしか書かれていないもの、採集地のはっきりしないものが出てくるたびに先生に謎解きのようなことをお願いしていました。このインクを使ったのはA氏、これはB氏の筆跡、この年にフィリピンに行ったのはC氏…時には古い採集手帳の行程を読み解いて採集地を調べていただいたこともありました。

最近先生は、寄贈された標本に、寄贈者、寄贈年度を記したコレクションラベルという小さなラベルを一つ一つ付ける作業を行っていました。ラベルを用意するのは私の役目でしたが、作業が速く、気を付けていないとあっという間にラベルが減ってしまうので、火曜日が近付くと残量をチェックしてラベルを補充するのが私の習慣になりました。

先生は若い頃から趣味で、^{こま}独楽や蘭など様々なものを収集されましたが、カタツムリもその一つでした。カタツムリは昆虫ではなく陸貝の仲間ですが、ご自宅にてカタツムリ標本を新しい箱に整



昆虫作業室にて

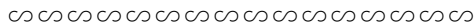
理し直し、総合博物館に寄贈して下さることになっており、私は標本箱に付ける見出しラベルを作るお手伝いをしていました。先生がラベルサイズ、学名、必要な枚数を手書きした用紙をもとに、パソコンでラベルを作るのですが、必ず大きさ見本を添えて、私が数パターンあるラベルサイズを間違ふことのないようひと手間をかけてくださいました。時々、昔とは学名が変わっていたり、インターネット上に複数のスペルが存在するなど正確なスペルがわからないことがあり、そのつど先生といっしょに正しい学名を探しました。

今年5月14日に先生は『日本陸産貝類総目録』という赤い本を持ってきて「次からはこの本で学名を確認しよう。」と話して帰られましたが、まさかそれが先生と言葉を交わす最後になってしまうとは夢にも思いませんでした。

先生のまわりにはいつも穏やかな時間が流れ、それがそのまま火曜日の作業室の暖かい雰囲気につながっていた気がします。特別だった火曜日の魔法が解けて、ただの火曜日に戻ってしまったような以前とは違う作業室で、減ることのないコレクションラベル、一度も使うことなく本棚に残された赤い本を目にすると寂しさが募ります。

標本に対し真摯に向き合う先生の姿を思い出しながら、これからも先生の教えを胸に私は標本整理を続けていきます。

久万田先生、本当にありがとうございました。



久万田敏夫前会長に感謝申し上げます 植物・菌類・図書ボランティア 星野フサ

「2002年～ボランティア記録」と表紙に記された大学ノートが2階のボランティア室に保管されている。このノートには17年前の北大総合博物館ボランティアの会の発足当時以降の記録が記してある。

2002(平成14)年12月17日にボランティアの会(仮称)が、会長は久万田敏夫先生、事務局は中野系・笠原明子・星野フサ、そして各グループの責任者(ボス)によって発足した。当時元気だった中野さんは化石、笠原さんは考古のボランティア、そして星野は高橋英樹先生のところの研究生であった。このころのボランティアの主力は北大の学生であった。北大が独立法人に変わる時代背景の中、手探りで多くの話し合いが久万田会長を中心に進められ、2003年2月21日「ボランティアの会会則」が承認された。

2004年7月1日第1回ボランティアの会総会が総合博物館2階共同研究室で開催された。司会の中野さんであった。各役員が選出され、博物館クイズが作られた時期でもある。2004年の方針としてボランティアを対象に講習会を開くことが決まり、第1回目の担当者は久万田会長が担当した。

当時はボランティア室を探し回っていて、ボランティアさんの手荷物を研究生だった私の机にお預かりしたこともある。ノートにはボランティア室が立派な部屋に決まって嬉しいとのメモ書きも残っている。第1回総会では、博物館側からの挨拶は高橋英樹先生より「日本で初めての試金石となろう。きちんとやってほしい」との期待のお言葉もあった。箕浦先生と天野先生も参加され、藤田正一先生が平成遠友夜学校からの寺西・鳴海・沼

田の3氏を紹介されたのが懐かしく思い出される。

2005年2月発行の『ボランティア・ニュース』創刊号は、館長挨拶として藤田正一先生より「ボランティア・ニュースができた!」、学生ボランティアの望月直さんは「ボランティアの会とは?」、沼田勇美さんは「ボランティア・ニュースへの期待」、星野は「明るい教室と机、そして本棚」、お知らせとして「ボランティア募集」と事務局が呼びかけた懐かしい記録が記されている。

2005年5月発行の第2号には、金上由紀さんは「植物標本貼りボランティア・原グループのご紹介」、久万田会長は「博物館に思うこと」を記されている。

この頃、独立行政法人に変わろうとする社会情勢の中、博物館ボランティア全員が久万田会長のもとで北大を応援しようと頑張っておりました。

久万田会長はいつもとてもお元気で、若い中野さんが先に旅立たれ寂しくなっておりましたところ、急な訃報に接し驚きました。久万田会長に対し17年間もの長い間お世話になった事に対し心から感謝の言葉を述べ、そして心からの冥福をお祈り致したいと思います。



ボランティアの会事務局打ち合わせ風景(2006年4月10日)左より高橋英樹教授、中野さん、久万田会長、望月さん、沼田さん。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 55

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2019年12月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>